



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

6

質的データの 分析

グラハム・R・ギブズ

砂上史子・一柳智紀・一柳梢 [訳]

質的研究の中核をなすデータ分析で、
もう迷わない！

トランスクリプションやフィールドノーツをどのように作成するか、
コーディング、比較分析はどのように行うか、
ナラティブやライフヒストリー研究の要点は何か、
分析用ソフトウェアはどのように活用すべきか、
データの膨大さや作業の緻密さにめげることなく、
説得力があり、意義深い質的研究を行うための基本方略がここに！

新曜社



SAGE 質的研究キット

ウヴェ・フリック監修

6

質的データの 分析

グラハム・R・ギブズ

砂上史子・一柳智紀・一柳梢 [訳]

新曜社

SAGE 質的研究キット 全8巻

1. 質的研究のデザイン	フリック, U./鈴木聡志 (訳)
2. 質的研究のための「インター・ビュー」	クヴァール, S./能智正博・徳田治子 (訳)
3. 質的研究のためのエスノグラフィーと観察	アングロシーノ, M./柴山真琴 (訳)
4. 質的研究のためのフォーカスグループ	バーバー, R./大橋靖史他 (訳)
5. 質的研究におけるビジュアルデータの使用	バンクス, M./石黒広昭 (監訳)
6. 質的データの分析	ギブズ, G. R. /砂上史子・一柳智紀・一柳梢 (訳)
7. 会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析	ラブリー, T./大橋靖史 (訳)
8. 質的研究の「質」管理	フリック, U./上淵寿 (訳)

ANALYZING QUALITATIVE DATA (2nd ed.)

Graham R. Gibbs

SAGE Qualitative Research Kit 6

Copyright © Graham R. Gibbs 2017. All rights reserved.

This translation is published under cooperation contract between SAGE and Shinyosha.



編者から

ウヴェ・フリック

- 「SAGE 質的研究キット」の紹介
- 質的研究とは何か
- 質的研究をどのように行うか
- 「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

「SAGE 質的研究キット」の紹介

近年質的研究は、そのアプローチがさまざまな学問分野にわたってしだいに確立され、尊重されるようになってきたため、これまでになかった成長と多様化の時期を謳歌している。そのためますます多くの学生、教師、実践家が、一般的にも個々の特定の目的のためにも、質的研究をどのように行ったらよいのかという問題と疑問に直面している。こうした問題に答えること、そしてハウターのレベルでそうした実際的な問題に取り組むことが、「SAGE 質的研究キット」（以下「キット」）の主な目的である。

この「キット」に収められた各巻は、全体が合わさって、質的研究を実際に行う際に生じる中心的な諸問題に取り組んでいる。それぞれの巻は、社会的世界を質的な見地から研究するために用いられる主要な手法（たとえば、インタビューやフォーカスグループ）や資料（たとえば、ビジュアルデータやディスコース）に、焦点を当てている。さらに、「キット」の各巻は、多くの多様なタイプの読者のニーズを念頭に置いて書かれている。「キット」とこれに収められたそれぞれの巻は、以下のような広範なユーザーに役立つだろう。

- 質的な手法を使った研究を計画し実行する上で問題に直面している、社会科学、医学研究、マーケットリサーチ、評価研究、組織研究、ビジネス研究、経営研究、認知科学などの質的研究の**実践者**たち。
- こうした分野で質的手法を使用する**大学教員**。授業の基礎としてこのシリーズを用いることが期待される。
- 質的手法が、実際の適用（たとえば論文執筆のため）を含めて大学の学業訓練の（主要な）一部である、社会科学、看護、教育、心理学、その他の分野の**学部生と大学院生**。

「キット」に収められた各巻は、フィールドでの広範な経験をもつだけでなく、その巻のテーマである手法の実践においても豊かな経験をもつすぐれた著者たちによって書かれている。全シリーズを最初から最後まで読むと、倫理や研究のデザイン、研究の質の査定といった、どのような種類の質的研究にとっても重要な諸問題に何度も出会うことだろう。しかし、そうした諸問題はそれぞれの巻において、著者の特定の方法的視点と著者が述べるアプローチから取り組まれる。したがって読者はそれぞれの巻で、研究の質の問題へのさまざまなアプローチや、質的データの分析のしかたへのさまざまな示唆を見出すであろうが、それらが全体として合わさって、この分野の包括的な描写を得ることができるだろう。

質的研究とは何か

質的研究のさまざまなアプローチにも研究者の大多数にも共通に受け入れられている、質的研究の定義を見出すことはますます困難になっている。質的研究はもはや、たんに「量的研究ではない」研究ではなく、それ自身の1つのアイデンティティ（あるいは多数のアイデンティティ）を発展させている。

質的研究には多数のアプローチがあるとは言っても、質的研究に共通するいくつかの特徴を確認することができる。質的研究は「そこにある」世界（実験室のような特別に作られた研究状況ではなく）にアプローチし、「内側から」社会現象を理解し、記述し、時には説明することを意図する。しかしそのやり方は実にさまざまである。

- 個人や集団の経験を分析することによって——経験は生活史や日常的・専門的実践と関係づけられることもある。それらは、日常的な知識や説明や物語を分析することによって取り組まれるかもしれない。
- 進行中の相互作用とコミュニケーションを分析することによって——これは、相互作用とコミュニケーションの実際の観察と記録、およびそうした資料の分析に基づく。
- ドキュメント（テキスト、写真・映像、映画や音楽）を分析することによって、あるいはドキュメントに類した経験や相互作用が残した痕跡を分析することによって。

このようなアプローチに共通するのは、人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みることである。相互作用とドキュメントは、協同して（あるいは衝突しながら）社会的プロセスと社会的人工物を構成する方法と見なされる。これらのアプローチはみな意味生成の方法であり、意味はさまざまな質的手法で再構成し分析することができ、そうした質的手法によって研究者は、社会的な（あるいは心理学的な）問題を記述し説明するしかたとしての（多少とも一般化可能な）モデル、類型、理論を発展させることができるのである。

質的研究をどのように行うか

質的研究にはさまざまな理論的・認識論的・方法論的アプローチがあること、そして研究される課題も非常に多岐にわたることを考慮するなら、質的研究を行う共通の方法を示すことはできるのだろうか。少なくとも、質的研究の行い方に共通するいくつかの特徴をあげることはできる。

- 質的研究者は、経験と相互作用とドキュメントに、その自然な文脈において、そしてそれらの個々の独自性に余地を与えるようなやり方で、接近することに関心がある。

- 質的研究は、最初から研究する事柄についての明確に定義された概念を用意し、検証仮説を公式化することを控える。むしろ、概念（あるいは、もし使うなら仮説）は、研究の過程で発展し、洗練されてゆく。
- 質的研究は、手法と理論は研究される事柄に適したものであるべきだ、という考えのもとで始められる。既存の手法が具体的な問題やフィールドに合わないなら、必要に応じて修正されるか、新しい手法やアプローチが開発される。
- 研究者は研究するフィールドの一員であり、研究者自身が、研究者というあり方でそこに臨むという点でも、フィールドでの経験とそこでの役割への反省を持ち込むという点でも、研究過程の重要な部分である。
- 質的研究は、研究課題の理解にあたって文脈と事例を重視する。多くの質的研究は一事例研究や一連の事例研究に基づいており、しばしば事例（その歴史と複雑さ）が、研究されている事柄を理解する重要な文脈となる。
- 質的研究の主要な部分は、フィールドノートやトランスクリプトに始まり、記述と解釈、最終的には知見の発表、研究全体の公刊に至るまでの、テキストと執筆に基づいている。したがって、複雑な社会状況（あるいは写真・映像のような他の資料）をテキストに変換するという問題（一般には文字化と執筆の問題）が、質的研究の主要な関心事となる。
- 手法が研究されている事柄に適切であると考えられる場合でも、それが質的研究にとって、そして質的研究の特定のアプローチにとって適切かという視点から、質的研究の質を定義し査定する諸アプローチについて（さらに）考察されなければならない。

「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲

- 『質的研究のデザイン』（ウヴェ・フリック）は、何らかのかたちで質的研究を使う具体的な研究をどのように計画し、デザインするかという観点から書かれた質的研究の簡潔な入門書である。それは、研究過程でそうした諸問題をどう扱うか、どう解決するかに焦点を当てることで、「キット」の他の巻に対するおおよその枠組みを与えることを意図して

いる。この本では、質的研究の研究デザインを作るという問題に取り組み、研究プロジェクトを機能させる足がかりについて概略を述べ、質的研究における資源といった実的な諸問題について述べるが、質的研究の質といったより方法論的な問題や倫理についても考察する。この枠組みは、「キット」の他の巻でより詳しく説明される。

- 質的研究におけるデータの収集と産出に、3冊が当てられる。第1巻で簡潔に概説した諸問題を取り上げ、それぞれの手法に対して、さらに詳しく、集中的にアプローチする。まず、『質的研究のための「インター・ビュー」』（スタイナー・クヴァール）は、特定の話題や生活史について人びとにインタビューすることのもつ、理論的、認識論的、倫理的、実践的な諸問題に取り組んでいる。『質的研究のためのエスノグラフィーと観察』（マイケル・アングロシーノ）は、質的データの収集と産出の第二の主要なアプローチに焦点を当てている。ここでも実践的な諸問題（サイトの選択、エスノグラフィーにおけるデータ収集の方法、データ分析における特殊な問題）が、より一般的な諸問題（倫理、表現、1つのアプローチとしてのエスノグラフィーの質と適切性）の文脈で考察される。『質的研究のためのフォーカスグループ』（ロザリン・バーバー）では、データ産出の第三のもっとも主要な質的手法が提示される。ここでも、フォーカスグループでサンプリングやデザインやデータ分析をどう行うかの問題と、データをどうやって生み出すかに焦点が強く当てられている。
- さらに3冊が、特定のタイプの質的研究の分析に当てられる。『質的研究におけるビジュアルデータの使用』（マーカス・パンクス）は、焦点を質的研究の第三のタイプに広げている（インタビューとフォーカスグループに由来する言語データと観察データに加えて）。一般に社会科学研究ではビジュアルデータの使用は主要なトレンドになっているだけでなく、データの使用と分析にあたって研究者を新たな実的な問題に直面させ、新たな倫理的問題を生み出している。『質的研究におけるデータ分析』（グラハム・R・ギブズ）では、どのような種類の質的データの理解にも共通する、いくつかの実的なアプローチと問題に取り組む。特にコード化、比較、コンピュータが支援する質的データ分析の使用

に、注意が払われている。ここでの焦点は、インタビューやフォーカスグループや個人史と同じく言語データにある。『会話分析・ディスコース分析・ドキュメント分析』（ティム・ラブリー）では、言語データから、ディスコースに関連する異なるタイプのデータへと焦点が拡張され、ドキュメントのような現存資料、日常会話の記録、ディスコースが残す痕跡の発見に焦点が当てられる。アーカイブの生成、ビデオ資料の文字化、それにこのようなタイプのデータのディスコースの分析のしかたといった、実的な問題が考察される。

- 『質的研究の「質」管理』（ウヴェ・フリック）は、質的研究の質の問題を取り上げる。この問題は、「キット」の他の巻でもそれぞれのテーマの文脈で簡潔に触れられているが、本書でより一般的なかたちで取り上げる。ここでは研究の質を、質的研究の現存の規準を使って見たり、あるいは規準を再定式化したり新しく定義するといった角度から検討する。この巻では、質的方法論における「質」と妥当性を定めるのは何であるべきかについて現在も進行している議論を検討し、質的研究における質を高め、管理するための多くの戦略を検討することになる。質的研究におけるトライアングレーション戦略と、質的研究の質を高めるといふ文脈での量的研究の使用に、特に関心が払われている。

本書の焦点、そしてそれが「キット」に果たす役割について概略を述べる前に、この「キット」が世に出る力添えをいただいた SAGE 社の方々に感謝を述べたい。いつのことだったか、このプロジェクトを私に勧めてくれたのはマイケル・カーマイケルであるが、いざ始めるに当たって彼の示唆は非常に役に立った。パトリック・ブリンドルはこのシリーズへの支援を引き継ぎ、継続してくれた。ヴァネッサ・ハーウッドとジェレミイ・トインビーは、われわれの草稿を本に仕上げてくれた。

本書と第2版について

ウヴェ・フリック

時に、データ^[訳注1]*収集が分析を準備する前段階という意味合いが強いのに対し、質的データの分析は概して質的研究におけるコアと見なされる。質的研究においてデータを分析するには異なるアプローチがある。より全体的なものもあれば、特定のタイプのデータにより特化したものもある。それら全てに共通しているのは、テキスト分析に基づいているということである。故に、質的研究におけるいかなる資料もテキスト*として分析されるべく準備されなければならない。場合によっては（たとえばナラティブのように）、テキストの内部構造が（半構造化インタビューのように）他の場合よりも重要になることもある。内容が（時に独占的に）分析の中心にくる場合もあれば、テキストにおけるやりとりも（フォーカスグループのように）同様に関係していたり、（会話分析のように）分析の中心であったりする場合もある。

本書では、質的データを分析する基本となる戦略がさらに詳しく説明されている。一番重点が置かれているのは、コーディング^[訳注2]*と分類である。二番目に重点が置かれているのは、ナラティブ*と伝記（バイオグラフィー）*である。三番目に重点が置かれているのは、この文脈におけるコンピュータの使用である。かなりの注意が比較分析*とデータ分析に特有の質、ならびに倫理学の問題に払われている。もっと実地的なレベルでは、質的データ分析のための3つの主要なソフトウェア（ATLAS.ti, MAXQDA, NVivo）について、それらで何ができるか、それらがどのように分析に影響を及ぼすかを示しながら

[訳注1] 右上にアスタリスクが付されている語は、巻末の用語解説に含まれている。適宜参照していただきたい。

[訳注2] コード化とも言う。

ら、比較可能なかたちで紹介する。

この第2版では、参考文献と上記ソフトウェアの記述が最新のものになっている。データ分析の準備と質的データ分析をどのようにディスコースやナラティブの研究に適用するかといった側面についても、拡充されている。さらにこの新しい版では、比較分析にいつそう力点が置かれている。

これらを中心に、本書は第一に、発言や語りのような言語データに関心があるいかなる質的データも分析する基礎を提供している。「SAGE 質的研究キット」との関連では、ラプリー (Rapley, 2017) とバンクス (Banks, 2017) の巻で詳しく記述されている。ラプリー (Rapley, 2017) の巻は、どちらかと言えばやりとり——特に会話——の分析についてであり、バンクス (Banks, 2017) は目に見える資料の分析を扱っている。またアングロシーノ (Angrosino, 2007; Coffey, 2017) の巻の中のエスノグラフィーに関する章や、クヴァール (Kvale, 2007; Brinkmann & Kvale, 2017) の巻の中のインタビューに関する章、バーバー (Barbour, 2017) の巻のフォーカスグループに関する章もこれを補完しており、これらはそれぞれのやり方から生じたデータ分析に特有の問題について述べている。最後に、フリック (2017c) によるグラウンデッドセオリーについての新しい本も、「キット」全体の視点を補完するものである。本書では本「キット」に補足して、質的研究におけるコンピュータの使用と、記録やメモ、研究日誌のようなデータを形成する文脈の中で書くことにかかなりの注意を払った。言語データを書き起こすことについても役に立つ提案をしている。倫理*や分析の質にも言及したその提案は、「SAGE 質的研究キット」中の、研究過程において質をデザインし扱うことに関するフリック (Flick, 2017a, b) の巻を補完するものである。本書『質的データの分析』第2版に関しては、全体がアップデートされ拡張されている。したがって、新しい「キット」の新しい版、新しい本との連関がはかられている。

目 次

編者から（ウヴェ・フリック）	i
「SAGE 質的研究キット」の紹介	i
質的研究とは何か	ii
質的研究をどのように行うか	iii
「SAGE 質的研究キット」が扱う範囲	iv
本書と第2版について（ウヴェ・フリック）	vii
1 章 質的研究の特徴	1
分析	1
質的データ	3
質的分析の実践	4
方法論	5
質的分析の目的	12
倫理	14
2 章 データの準備	19
トランスクリプション	19
トランスクリプトの作成	27
トランスクリプトの印刷	33
インターネットのデータ	34
メタデータ	36
アーカイブのための準備	37
整理する	37
3 章 書く	43
研究日誌	45
フィールドノート	46
メモ	51
研究レポートを書く	54

4 章	主題コーディングとカテゴリー化	63
	コードとコーディング	63
	コーディングの手順	67
	データ駆動か、コンセプト駆動か？	72
	何にコードをつけるか	74
	コードによるテキストの取り出し	75
	グラウンデッドセオリー	80
	コーディングのタイプと方法	87
5 章	伝記、ナラティヴ、言説的要素の分析	91
	ナラティヴ	91
	ナラティヴの情報源	95
	ナラティヴの機能	95
	ナラティヴとライフヒストリー	98
	実際の分析作業	100
	ナラティヴのジャンルあるいは構造	105
	ディスコース・アプローチ	112
6 章	比較分析	125
	コード階層	125
	比較	131
	モデル	145
	理論と説明を発展させる	147
7 章	分析の質と倫理	157
	従来へのアプローチ	157
	リフレキシヴィティ	159
	妥当性	161
	信頼性	167
	一般化可能性	170
	分析の倫理	171
8 章	コンピュータを用いた質的データ分析を始める	179
	データの質的分析を支援するソフトウェア	180
	プロジェクトに取り込むためのデータの準備	186

新しいプロジェクト	189
文書	193
コーディング	196
9 章 ソフトウェアを用いた検索やその他の分析手法	209
検索	209
属性	220
コードと属性による検索	224
10 章 すべてを総合すると	235
読むこと	235
書くこと	236
コーディング	236
関連性とパターン	238
分析の質	238
訳者あとがき	241
用語解説	243
文 献	253
人名索引	260
事項索引	261

装幀＝新曜社デザイン室

ボックスと図表リスト

ボックス

2.1	会話の持つ特徴	24
2.2	異なるレベルのトランスクリプションの例	25
2.3	メタデータ文書の典型的な内容	36
2.4	管理を要するデータと文書	38
3.1	ヴァン・マーネンによるフィールドの物語の形式	49
3.2	メモの用途	53
3.3	最初の草稿を修正するためのガイドライン	57
4.1	コード、インデックス、カテゴリーあるいはテーマ	64
5.1	修辞	93
5.2	比喩と説明	94
5.3	よくあるライフヒストリーのテーマ	99
6.1	階層の各部の用語	126
6.2	コードのプロパティとディメンションについての考察	129
6.3	部分的な事例の並べ替え	140
7.1	リフレクシヴな良い実践に向けた提言	160
7.2	引用を含めるためのガイドライン	167
8.1	プレーンテキスト形式、リッチテキスト形式、PDF	187
8.2	同じことを行うための別の方法	198
9.1	文字列検索機能を創造的に用いて、妥当性を高める	220

図

4.1	コーディングしたバリーの回答	72
4.2	1行ごとのコーディングを示すインタビューの抜粋	85
6.1	新しいサブ階層に整理する	128
8.1	ATLAS.tiのメインウィンドウ	190
8.2	MAXQDAのメインウィンドウ	191
8.3	NVivoのメインウィンドウ	192
8.4	ATLAS.tiの一次文書の表示例	195
8.5	NVivoのポップアップウィンドウからの新規ノードの作成	198
8.6	MAXQDAのコードシステムウィンドウ	201

8.7	余白エリアのバーカストライプをクリックすると 引用中の文字列が示される (ATLAS.ti)	202
8.8	文書と該当するコーディングストライプ (NVivo)	203
8.9	MAXQDA の検索済みウィンドウ	205
9.1	ATLAS.ti の文字列検索メニュー	213
9.2	MAXQDA の「検索結果」ウィンドウ	214
9.3	NVivo の「テキスト検索クエリ」ウィンドウ	214
9.4	ATLAS.ti の「Document Group Manager」	221
9.5	MAXQDA の文書属性ウィンドウ	222
9.6	NVivo の事例の属性プロパティ	223
9.7	ATLAS.ti の「Analyze」タブと「QueryTool」ボタン	227
9.8	ATLAS.ti の「QueryTool」ウィンドウ	227
9.9	NVivo コーディングクエリウィンドウ	229

表

2.1	トランスクリプションの間違いの例	32
3.1	2つの黄金律	45
3.2	質的研究レポートの構成	56
4.1	何にコードづけが可能か？ (例付き)	76
5.1	物語の演劇的分類	107
5.2	ラボフが提唱するナラティヴの要素	110
5.3	マリーの物語	111
6.1	コード階層にした親子間の概念的関係のタイプ	127
6.2	質的な表の例、友人と家族	135
6.3	表のセルに入れる内容	137
6.4	事例間の比較例	139
6.5	性別による職の探し方	143
6.6	単一事例におけるの比較の例	144
6.7	アクシャル・コーディング・モデルの要素	146
9.1	コード A とコード B を用いた一般的な論理型検索と近接検索の例	226



1 章 質的研究の特質

分析

質的データ

質的分析の実践

方法論

倫理



この章の目標

- 質的研究には明確ないくつかの特徴があるが、しかし同時に、それらは質的研究者の間でしばしば見解が一致しないことを理解する。
- 質的研究について、いくつか異なる見解があることを知る。
- それらの見解は分析に影響を及ぼし、質的であることの「領域」の境界と質的研究が採用するいくつかの特徴的なスタイルとアプローチを決めることを理解する。

分 析

分析とは、何らかの変換を意味する。まずは、ある程度の（時に多量の）質的データを収集する。続いて、分析の手続きを通して、それらを明確で、理解可能で、示唆に富み、信頼に足り、そしてオリジナルな分析となるように処理する。このデータ変換についてさえも、意見の相違がある。ある研究者たちは質的データの分類、検索、索引づけ、取り扱いを含む「処理」過程に焦点を当てる。そして通常、分析的概念を生成するためにいかにしてこの過程を使

用できるかという議論が伴う (Maykut & Morehouse, 2001; Miles & Huberman, & Saldaña, 2013; Spencer, Ritchie, O'Connor, Morrell, & Ormston, 2014)。この過程は、質的調査の中で生み出される膨大なデータを扱うようデザインされる。データ*の種類には、インタビューのトランスクリプト (書き起こし) (Kvale, 2007; Brinkmann & Kvale, 2017 参照)、フィールドノート* (Angrosino, 2007; Coffey, 2017 参照)、収集された文書資料、映像や録音記録 (Rapley, 2017 参照) などがある。これらのデータのすべてを分類し、くまなく探索し、同時に、データに根ざした一貫性のある洞察に富んだ分析を作り出すこと——つまり、データが支持的な良い証拠となること——は、何ともやっかいな頭の痛い問題である。それには、データへのよく組織された、構造化されたアプローチが求められる。CAQDAS* (computer-assisted qualitative data analysis: コンピュータを用いた質的データ分析) がとても人気がある理由の1つがここにある。ソフトウェアはあなたのために考えてはくれないが、これらの「処理」過程にはとても助けになる。

一方で、分析は解釈と語り直しにかかわり、想像的で思案的であることを強調する研究者もいる (Denzin, 1997; Giorgi & Giorgi, 2003; Mishler, 1986; Riessman, 1993)。この考え方に立つアプローチは数多くあり、会話分析やディスコース分析* (Rapley, 2017 参照)、ある形態の現象学、伝記的、ナラティブ的アプローチ、さらには近年のエスノグラフィックな方法 (Angrosino, 2007) などがある。これらのアプローチは、質的データは意味に富み、単に人びとが語るテーマ*となる事柄の範囲を明らかにするだけでなく、彼らがそのコミュニケーションを枠づけ、かたちづくる方法と、さらには、そうしたコミュニケーションが彼らとその行為を枠づけ、かたちづくる方法をも認識し分析するために、分析の中で解釈される必要があることを強調する。

質的データの分析に関する文献著者の大半は、その分析がデータを処理することとデータを解釈することの両側面を含むと認識している (Coffey & Atkinson, 1996; Flick, 2014, 2017a; Mason, 2002; Bazeley, 2013)。時に、それらは同時に用いられるが、しかし、しばしば順次的に用いられ、まず「処理」から始められ、次にデータを縮減して要約したり図表で示したりし、そして解釈的分析と結論の叙述をもって終える。

質的データ

上記で示唆したように、質的データはとてつもなく多様であることはさておき、本質的に意味を有する。質的データは計算と尺度を含まないが、まさに人間のコミュニケーション行動——文書、聴覚的あるいは視覚的——、象徴的あるいは文化的産物のあらゆる形態を含む。これには以下にあげるいずれもが含まれる。

- 個人インタビューとフォーカスグループ・インタビュー、およびそのトランスクリプト
- エスノグラフィックな**参与観察**
- Eメール
- ウェブページ
- 広告：印刷物、映画、あるいはテレビ
- テレビ放送のビデオ録画
- ビデオ日記
- インタビューとフォーカスグループの映像記録
- 会議やその他の組織の文書
- 本や雑誌などのさまざまな文書
- 日記
- オンラインチャットグループでの会話
- オンラインソーシャルネットワークのページ
- オンラインニュースのライブラリー
- 静止画
- 映画
- 実験室でのセッションの映像記録
- 家庭用ビデオ

質的分析に用いられる質的データの中で最も一般的な形態はテキストデータである。テキストデータには、インタビューのトランスクリプト、エスノグラフィック*研究のフィールドノート、その他の文書がある。ほとんどの音声、映像のデータは分析のためテキストデータに変換される。というのも、テキストデータは、上述した「処理」技術を用いることのできる簡便な記録形式だからである。しかしながら、デジタルの音声や映像記録の発達と、それを分類し、索引をつけ、検索*するためのソフトウェアが使用できるようになり、文書化への必要性和欲求は、将来的に減じるだろう。さらに、映像データを使用すれ